

## スポーツ競技団体の役員として薬剤師に期待するもの

坂本 陽一

**What the Japan Cycling Federation Hopes to Accomplish in Cooperation with Pharmacists in Doping and Implementing Effective Anti-Doping Controls**

Yoichi SAKAMOTO

*Japan Cycling Federation, Nihon Jitensha Kaikan 3 goukan,  
1-9-3 Akasaka, Minato-ku, Tokyo 107-0052, Japan*

(Received August 31, 2011)

Today the number of international cycling races has increased markedly compared with the past, and inevitably there are many riders traveling all over the world to participate in these events. It is inevitable that riders often become exposed to many more drugs at the cycling venues or through the internet where a wide selection of drugs is available. According to Union Cycliste Internationale (UCI) regulations, riders must report to a Doping Control Officer (DCO) any medications taken in the 72 h preceding a race. High level international teams are very familiar with these regulations and submit these reports with little problem. Lower level teams with less expertise, however, tend to have much more trouble submitting these reports. The close cooperation with pharmacists is believed to promoting the healthy development of the sport. To improve anti-doping controls, I strongly believe that good communication among staff during the events to exchange information smoothly and also good education through regular seminars and symposia for the staff involved are definitely needed. In other words, we have to develop human resources to build up a firm foundation to constantly generate future leaders.

**Key words**—stage race; Union Cycliste Internationale (UCI) regulation; prohibited medication

## 薬剤師との係わり

競技団体は、その種目を総括する国際競技連盟 (IF: International Federation) と国内競技連盟 (NF: National Federation) からなります。自転車競技で申しますと、IF が UCI (国際自転車競技連合: Union Cycliste Internationale) であり、NF が JCF (日本自転車競技連盟: Japan Cycling Federation) に該当します。

WADA (World Anti-Doping Agency: 世界アンチドーピング機構) や JADA (Japan Anti-Doping Agency: 日本アンチドーピング機構) が設立される以前は、各競技連盟が独自のアンチドーピング規則を持っており、1999年3月、UCI アンチドーピング規則の中にある禁止薬物の効能 (主なドーピン

グ物質とその副作用 23 ページ) を自国の言語に翻訳し、加盟団体や選手に徹底するように指示がありました。そのことを実践した証拠に翻訳物を UCI に送るよう確認を求められました。対応期限が 7 日間くらいしかなく狼狽しましたが、協力してくれる薬剤師がいらしたおかげで NF の立場が保てました。この件が、本連盟と薬剤師との係わりの最初の内容になります。

## 自転車競技の特性

競技種目を挙げてみますと、トラック、ロード、マウンテンバイク、シクロクロス、BMX、インドアサイクリング、パラサイクリングなどが挙げられ、当然のことですが、これらすべての種目がドーピング検査の対象となります。その中であって、特にロード競技に、ドーピングの歴史を垣間見ることができます。なぜロード競技なのか。ロード競技の中のステージレースを例にとって説明してみます。ステージレースの特徴は、大会日数、走行距離が長いことです。このレースで最も有名なツールドフラ

日本自転車競技連盟 (〒107-0052 東京都港区赤坂 1-9-3 日本自転車会館 3 号館 3 階)

e-mail: y-sakamoto@staff.tohoku-gakuin.ac.jp

本総説は、日本薬学会第 131 年会シンポジウム S36 で発表したものを中心に記述したものである。

ンスの今年度大会を例にとってみますと、一日の走行距離が100キロ以上で、長く走る日は250キロ以上走行する日もあります。大会日数も3週間もあり、大会期間中の総走行距離は3430キロにもなります。これらの条件の中で選手、監督は、試合の疲労回復、勝利へのプレッシャーと闘いながらの連日になります。これらから逃れるために薬物使用に走るのではないかと想像することができます。

### UCIの動き

UCIは他のIFと比較して、アンチドーピングに関しての規則や機関の組織内への立ち上げが早かったIFではなかったと考えられます。2001年にUCIが発刊した冊子“40 years of fighting against doping”によると、1964年に世界のスポーツ団体として初めて、Medical Commissionを立ち上げ、1969年にはMedical Control Regulationを作りました。

この背景には1967年に行われたツールドフランスにおいて、トム・シンプソンという英国選手の死亡事故があり、その事故の原因が禁止薬物使用によるものであったことから、選手保護の立場とドーピング問題が伝統あるこの大会へ及ぼす影響を考慮し、早急に立ち上げたものと考えられます。

検査に係わるスタッフの名称は現在、WADA、IF、JADA共通でDCO（ドーピングコントロールオフィサー）という名称になりましたが、Medical Commission立ち上げ当時は、Medical inspectorと呼ばれており、1997にAntidoping inspectorに呼び名が変更になり、しばらくこの呼ばれ方が続きました。ここ数年前から現在の呼び名、DCO（Doping Control Officer）に変更になったところです。

### 日本国内のアンチドーピング活動の歴史と現状

日本国内のアンチドーピング活動について、ツールド北海道国際大会を例にとって記してみます。この大会は、1987年に始まり、1997年から国際大会に移行し現在に至っています。ドーピング検査については、国際大会に移行した1997年から検査を実施するにあたり、参加チームの薬物使用の実態把握を目的に使用薬物のリスト提出を義務付けてみました。UCI規則では検査官の判断により、スタート72時間前までに使用した薬物のリストを提出させることができることになっています。このことにより判明したことがいくつかあります。まず、薬物に対する認識に関して、強豪チームほど、チーム所属

選手が取得している薬物の詳細について把握がされているということです。弱小チームはこれとは逆に十分な把握がされていない実態が把握できました。さらにこの弱小チームの薬物に対する認識を分析してみると、大会に出場する選手というよりは、一般の方とあまり変わらない薬の使用状況があることがわかりました。具体的にいうと、風邪薬を始め、禁止薬物を含有しているだろうと思われる薬を無意識に近い状態で使用していたことを知ることができました。とりわけ、学生チームにおける薬物の申請書には驚く内容が多くありました。この状況を踏まえ、講習会などで認識を改めるよう指導を行うようになり、現在を迎えています。

### 薬剤師への期待

アンチドーピング検査スタッフの中に薬に精通している薬剤師さんがいるというだけで、大会検査を行う際、特別な安心感があります。私ども連盟としては、大会にいらして頂くスタッフとしての薬剤師さんには、検査を担当するというだけではなく、競技に対して興味を持って頂き、選手ががんばって結果を出したことへの評価をしてほしい、そんな思いがあります。検査室に選手がいらした時、最初にこちらから、「優勝おめでとうございます」という挨拶から始まることで、どれほど雰囲気や和むことでしょうか。検査がスムーズに進む第一歩でないかと思えます。

ここで、現在連盟が押し進めている、薬学部学生登用によるシャペロン業務について記したいと思います。シャペロン業務とはご存知の通り、検査対象選手への通知、対象選手の検査室到着までの行動観察が主な内容ですが、当初は、自転車競技の経験もある人を大会開催地の地元連盟や主催連盟を通して依頼していました。競技に精通しているというメリ



坂本陽一

1955年生。東北学院大学文学部卒。東北学院大学中央図書館勤務。日本自転車競技連盟アンチドーピング委員会委員。国際自転車競技連合(UCI)インターナショナル・コミッセル。国際自転車競技連合DCO(ドーピング・コントロールオフィサー)・JADA(日本アンチドーピング機構)DCO。自転車競技のアジア地域におけるアンチドーピング検査の草分け的存在。アジア大会を始め多くの国際大会、国内大会で活躍中。

ットは多いですが、反面、問題点も浮き彫りになりました。問題となる具体的な内容とは、皮肉なことでありますが、シャペロン業務中にしばしば選手監視の眼が、競技場内で行われている競技の方へいつてしまう、このようなことがしばしば起きてしまいました。シャペロン業務の内容があまりよく理解されていなかった最初の頃はよかったです。その求められる内容が周りに知れ渡るようになった昨今では、シャペロンのこのような行動は検査そのものへの信頼関係を崩すことにもなりかねません。

これに対して薬学部生登用によるメリットを挙げ

てみますと、薬学の授業でアンチドーピングに関する基礎知識を学び大会にはそれを実践する形で参加するため、シャペロニング活動も授業の延長上であり、取り組む姿勢が真剣そのものです。その結果得られる効果は非常に高く、薬学部学生の真摯にシャペロニングをする姿は、選手のみならず周りのチームスタッフ、ファンから見ても好印象に映るという評価を頂いております。これは、アンチドーピング活動がよりよく理解されることにもつながることであり、連盟としても大いに期待するところであります。